
ヒエルア大陸英傑録「アルニス編」

チリドック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒエルア大陸英傑録「アルニス編」

【Nコード】

N1583Z

【作者名】

チリドック

【あらすじ】

およそ五十年ほど昔の人間種族と魔物との「大戦」から三十数年。大陸には魔物の残党との小競り合いはあるものの平穏が戻りつつあった。

そんな大陸の中西部に、やる気皆無の男アルニス・ヴァレリーが大陸でも名高い騎士団になぜか所属していた。毎日、幸せな怠惰な生活を送っていたが、ある夜を境にやっかい事に巻き込まれてしまう。

ブローグ

ブローグ

「わたしを置いていかないで！」

だが男は、ゆっくり首を左右へ振った。

その返答を予想していたものの、実際面と向かってされると胸が痛んだ。

男はただ平然と、外から聞こえる怒号と絶叫に肩を震わせ涙目で見返してくる少女を見つめていた。

部屋は四方石造りの堅牢な地下室で、急遽武器庫から避難所となつてからは、

武具の変わりに食料や水が四隅に押し込められ重要宝物は鉄製の箱に厳重に守られていた。

明かりは小さなランプの明かりだけでいまの自分たちの状況と重なることもできた。

いま、自分たちはこのランプのごとく、

風一つで消えてゆくほどもろい状況に置かれていた。

そんな不安の中で石の上に布を数十枚敷いただけの

簡素なベッドに少女は脱力したように腰掛けると、

両手を膝の上で握り、男の言葉に失望した瞳で睨みあげて声を荒げた。

「騎士がわらわの命に応えられぬと言うのか!？」

だが男は、先ほどと同様に首をゆっくり横に振る。

少女から騎士の顔は窺い知ることはできず、その騎士の感情を汲み取るにはやや難があった。

唯一知ることができたのは騎士の背後に伸びる階段を隔てた扉の隙間から

わずかに漏れる紅い光が騎士の人影を威圧的に浮かび上がらせていたということだけだ。

男は軽く頭を下げて、

「必ずお迎えに上がります」

と、声を少しふるわせながら呟いた。

その言葉の中には、けっして偽りない決意がこめられていたが彼の上下する両肩の速度は明らかに体力の限界を感じさせるモノで説得力には欠けていた。

それを悟られまいと、男は少女には見えないと知りつつ目を反らした。

右肩から流れる血が固まって二の腕から剣先までをまるで呪詛の模様のように

赤黒い蛇のように暴れていた。

すでにこの部屋へ逃げ込んだときにはすでに騎士は血まみれだった。

鋼の甲冑は傷だらけで、肩当てと胴回りの一部は乱戦の最中いつのまにか欠損していた。

手足の至る所に包帯を巻き、兜と頭の間からも血がにじみ出ている。

疲労と出血、地下室の淀んだ空気が目眩を誘う。

それでも氣力を失わず戦える自分に、男は騎士としての誇りを感じていた。

男は喉の奥から溢れようとする血を押し殺して浅く呼吸すると再び少女の姿が唯一見えていた薄暗い足下をたよりに出口へと歩いて行った。

もう少し明かりの範囲が広がったなら、陽光を切り取ったかのような美しい金髪と、

蒼空を盗んでその目にはめ込んでしまったかのような美しい碧

眼が騎士の瞳に映るはずであった。

騎士は最後にもう一度その姿を見たかと胸中でつぶやいた。そして、階段を上がりきると荒い息を必死に抑えて口を開いた。

「私には、姫君をお守りする使命を持っております。

皆様をここへご案内する少しの間ですから、どうかご辛抱ください」

必死に笑みを浮かべてみた。

だが、当然ながら少女には見えない。やがて、涙をすすする音が喧噪に混じってかすかに部屋に響いた。

やがて不思議と喧噪と物音の音は遠ざかり、悲しい音が重くそして大きく騎士の心に応えた

男は動揺し思わず一步前へと踏み出したその時、頭上の階で圧倒的な質量の物体が

落下する衝撃が振動となって襲った。

二人の肩がびくつと動く。少女は怯えた猫のようにその場で固まっとうごかなくなった。

四方の石壁が震えて、天井からは小石がぱらぱらと落ちては二人に降りかかる。

上の階の柱でも倒れたのだろう・・・

彼は天井を苦々しく睨みながら、剣を持つ手に力をこめる。

「水と食料も2、3日分あります。もし私が戻らなくとも

その間に誰かはここに来るでしょう。

私の従者にも私に何かあれば姫をと言いつけておりますからご安心下さい」

彼は無意識のうちに死を受け入れ始めていることに失笑した。

王城落日の夜に、守るべき者達と命を散らせるという自己満足が少しはあったのかもしれない。

騎士は決意して、齒を食いしばり早足で再び少女に歩み寄り足下で跪くと、

涙で濡れた冷たい少女の手にキスをする。

そして見上げると、涙で紅くなつた碧眼で言葉を失つたかのよう
うに

ただじつと騎士を見下ろしていた。

男は微笑みかえすと黙って腰に収まっていた短剣を、

震える少女の掌に置いて閉握らせてやると拳にキスをする。

再び、少女の目は決意が揺らいでしまったため見なかった。

「では、行ってまいります」

優しくこの夜で最も尊き女性の手を二度ほどさすってやると、

騎士は緩慢な動作で二歩後ずさつて

仰々しく一礼すると踵を返した。

少女が引き留めようと伸ばした手は空を切り、胸元に戻す間には

男は石段を駆け上がり、重い鋼の扉を血まみれの手で押し開けた。

瞬間、かすかだった多くの怒号と悲鳴が大音響で室内に響き渡
る。

鋼の交叉する音が耳を劈き、少女はおもわず耳をふさぐ。

やがて熱風と黒煙が流れ込んできた。

咄嗟に身を屈めた少女の視線の先に赤いものが見えた。炎だっ
た。

息を吸うだけで咳き込む強烈な熱気が、室内に流れ込む。

ひんやりとしていた空気は一変し、数十分前の地獄絵図が頭を
駆けめぐる。

頭を抑え、震える両膝をもつ片方の手で必死に押さえつける。

少女は必死に名を叫んだ。騎士の名を・・・

やがて辺りが静まりかえり顔を上げたときには、

重い扉は閉じ先ほどの薄暗い世界が彼女を包み込んでいた。

・・・

時間が止まったようだ。

まるで頭を駆けめぐった地獄絵図も、

騎士とのやりとりも一時の夢であつたかのよう・・・

「・・・・・・・・」

まるで聴覚を悪魔にでも奪われたかのように、静寂が訪れ恐怖が少女を襲う。

時折起こる石壁の震えと、頭上からおちてくる砂と誇りが一層寂寥感を募らせた。

再び小さなランプのほのかな明かりだけが、地下室に住むものの影を刻んでいた。

彼からもらつたお守りを両手で包んで胸のあたりに置くと祈つた。

いつまでもいつまでも。

それは祖国でも、王でもなく。

たった一人の騎士へ少女は祈り続けた。

プロローグ（後書き）

剣と魔法をテーマに一度しっかり書きたかったので始めました。
なんとか完走を目指します^^;

女難の夜

いったいオレはどこで間違っただろう？

彼女を救うつもりが、なぜこんな事態になったのだろうか？

僕はただ本気で愛していたから、誠心誠意彼女に尽くしていただけなのに。

それをすべて受け止めてもらっていると考えたのは結局はエゴに過ぎなかったのか。

娼婦である彼女をボロ雑巾のように扱う雇い主や卑猥な妄想のはけ口としか

考えていない客から守ってさえいたのに、

なぜこんな事になったのだろうか？ と、アルニスは何度も脳内で反芻する。

やや伸びた赤髪を軽くかき上げると、失望の色が濃い碧眼が月夜に輝いた。

次の瞬間彼女の雇った巨漢の男達に殴り飛ばされて、仰向けで倒れたまま呻く。

アルニスは半眼で雲一つ無い闇に浮かぶ満月へ向けて嘆息しながら体を起こすと、

月明かりでわずかに窺い知ることのできた七、八人の人影を凝視して観察した。

「安心しな。殺しはしねえよ坊主」

自分を殴った人影は次の瞬間嘲笑をアルニスに浴びせ、続いて周囲の人影もそれに続いた。

人気のない、窮屈な石壁に囲まれた裏路地に日常的に繰り返される夜の光景がそこに広がっていた。

そしてまさに最中に自分がいるのだという事実には、アルニスは奇妙なほど落ち着いていた。

どこか遠くで聞こえる怒号と女性の卑猥な笑い声、子どもの悲鳴その他様々な音が響いてくるものの

じつは手をついたところに馬の糞があつて、汚れを落とそうと石畳にこすりつけていて

そちらのほうにむしろイライラしていた。

アルニスのいるこの街は、ルーディンという名で知られていた。

日中は百八十度趣が変わり大陸商人・海を超えてきた商人と航海士で賑わい

活気に溢れ夢と希望が潮風の上を泳ぎまくっていたものだった。

だがこの街にすむ人々にとって夜の裏道は、まさに闇の住処となっていた。

そんな悪夢の一端こそが、まさにアルニスの前で嘲笑する彼らであつた。

人々の欲望を貪り、正直者をけ落とすことで這い上がることを夢見るたぐいの人間。

昼間は山奥、地中に潜む獣のように息を潜ませて自分たちが動けるようになったら住処からでてくる

獣に最も近い人間かもしれない。

そんな類の連中はいつの時代もいるもので、

ルーディンが所属するロネキア王国の王？に次ぐ大都市とし

て知られたこの商業都市でさえ例外ではなく、

強力な騎士団が治安をおこなっているとはいえこうした事件は後を絶たなかった。

故にアルニスの職場の連中は、生ゴミと彼らを侮蔑し、自分たちを回収屋とよく例えた。

やがて、中央にいた細身の人影が静かに一歩進み出た。

人影の後方にあつた扉のそばに松明が紐でぐるぐるに固定されていたのでその人物が

アルニスがよく知る女性であることが容易に分かる。

黒いガウンが松明の明かりでなぞられて unnecessary 存在感を醸し出している。

「まったく、あれほどのままでいい、って！ ほっとけていったのにさ

毎日来て金をたくさんくれればいいっていったじゃないかよ

身請けなんて望んじやないって。兄さんも分かってたんだろね！？」

人の神経を逆なでするような芝居じみた口調で、女はアルニスにこれまで

聞かせたことのない冷酷な声色で告げた。

それでもすがるようにアルニスは叫ぶ。

「わ、わかるもんか！？ オレは本気だったんだ。だからこうして身請けする金を

つり上げられたから駆け落ちしようとしただけで・・・なのになんで密告したんだよ！？

君になんの特もないじゃないか!？」

一瞬の沈黙の後、周囲の男の影が再び下品な笑いでバカだなあなどと嘲笑し、続けて女も呟く。

「だったら聞くけど、あんたについてったらなんの得があるんだい？ 大金が転がり込むわけでもなし」

同時に笑いが臭く陰気な路地裏に響き渡り、周囲の喧噪とこだました。

アルニスは失望で顔をしかめた。こめかみを押さえようにも手が衛生面の都合上怖くあてられず困った。

「悪いけど、二度と目の前に出てこないで」

「そういうことだ坊主、死ねだとさ」

「楽に死なせちゃうから安心しな」

「言い残すことがあればママに伝えてあげるよぼっちゃん」

その他色々好きなことを呟きながら人影達は間合いを徐々に詰めていく。

唯一の逃げ道だった大通りへの道は閉ざされ円陣で囲まれてしまった。

アルニスは特に男たちを気にした様子はなく溜息を繰り返しながら

立ち上がると同時、前二人の影が手に何かを持って接近した。

ナイフ、棒や剣それとも斧かと瞬時に脳裏によぎるが敵の動きが鈍すぎるため予測を停止した。

膝を軽く曲げ、すぐに反応できるよう拳を軽く握り構えた。

そしてまず先に近づいた男の喉を横殴りに失神させ、続いて近づいてきた

男の脇腹へ拳を突き立て、右ハイキックで一蹴して悶絶させた。

予想外の展開に女は絶句し、残った左右に一人、後背二名あわせで四人の巨漢は一瞬戸惑い動きを止めた。

瞬間、アルニスは大きく一步後退したかとおもつとその後退した足を軸足にして

逆足で後方一人を跳び蹴りで吹っ飛ばした。

さらに隣のもう一人が啞然として反応できないうちに鳩尾に正拳をくらわせその場に崩れさせる。

そこまでの動作に数十秒ともかからぬ無駄のない動きでアルニスは再び構えた。

「よってたかってガキガキっていいやがって！

おれはもう21になってんだ。女も知ったしバカにすんな！」

足下で悶絶している男の頭を蹴飛ばして言い放つ。

知人が聞いたら腹をこらえて笑ったろうその強がりな言葉は今回に関しては

鋭い力を持つて圧力へと変わった。

残った二名の男達は悲鳴をあげて路地の向こうへと消え、女とアルニスだけが残された。

一步、また一步と、アルニスは女へと近づく。

女は小さな悲鳴ともならない声をあげて後ずさると木製の扉にぶつかる。

振り返って扉を開け逃げ出してしまいたかったが腰が抜けたのか、女は手すりにしがみつくようにその場にしゃがみこんだ。

「殴ったりはしないよ大丈夫」

急に気分が冷めたのか、アルニスは自分を振った女へ複雑な思いで声をかけた。

だが、女はすすり泣くばかりで反応がない。

「ごめんなさいとばかりいつてもう駄目なようだった。

いまならまだ間に合うかも。

最後のチャンスかもしれないと意を決し石階段の一段目を踏み出し優しく手を差し出したその時、

アルニスは殺気を感じ後方へ飛び退いた。

同時に黒く巨大な何かが女のいた空間に衝突した。

轟音と地響きが大気を混乱させ、美しい満月は砂やゴミでぼんやりと遠くに感じられた。

袖口で口元を抑えながら、正面を凝視してアルニスは周囲が落ち着くのを待つ。

やがて、周囲が落ち着きを取り戻して黒く巨体なそれを凝視する。

険しかった眉間の皺が一層深くなり、嫌悪感があからさまに彼の表情に表れた。

そしてさきほどまでいた彼女はまさに食されていた。

動物が獲物を前足でしっかりと挟んで食するように喰らっている。

全体的に丸みを帯びた物体が第一印象。

極端に言えば赤くなった瞳孔を数メートルまで巨大にして剛毛を生やし、

丸太並みのでかい手足をつけたような生き物だった。

大陸ではこの類の、人間ではまず操ることのできない異形の存在を魔物と呼んでいた。

昔、魔物は時折こうして人の街にやってきては腹の虫を納めにやってきたという。

しかし、三十年以上前に人間と魔物の戦いで人間が勝利してからはその数は減っていたし、

凶暴な魔物はほとんど狩るか、王都の強固な監獄に閉じ込められている二つに大別されていた。

しかしその常識が、自分の目の前でもろくも砕かれたことにアルニスは悲痛のうめきを漏らした。

よりによってこんなときにしかも彼女がやられるなんて。

アルニスは、先ほどは思いとどめた頭を抱える仕草を無意識にした。

こんなにひどい日は久しぶりだと独りごちる。

そして、骨や肉をかみ砕く音が終わったその時背筋に寒いなにかが走った。

再び前を向くと、魔物は女の喰いカスが無惨にも踏みにじりながら近づいてきた。

「仇を取ってやる」

ズボンのポケットから、指の甲である第一・第二関節へ特殊な鉾石がはまり固定されるように

設計された物々しい黒い手袋を取り出すと それを手にはめながら、

「あー手袋も洗わなきゃな」

気持ちを切り替えたように、アルニス先ほど悪漢を倒したときと同じように

緩慢な動作で間合いを計っていく。

一方の魔物は、腹にすべて入れて少し落ち着いたのか先ほどのような荒々しい様子はなくまるで

飼い主が飼い犬に近づいていくような余裕の足取りだった。

そして間合いまであと一歩というところで、彼の後方から飛んできた炎の槍が頬を掠めて魔物を刺し貫いた。

魔物は耳を劈く咆哮を放つ。更に槍は何かには操られたかのように360度自在に

魔物の中を旋回してかき回し、ズタズタに灼きながら切り裂いていった。

咆哮はやがて呻きへとかわりそして最後には犬猫並みの小さな鳴き声程度まで

弱まりやがてすべてが静かになった。

じわじわと痛む頬に手を当てると軽く痛んだ。火傷をしている・

とにもかくにも終わった。

気づけば、周囲の喧噪は消えていた。

おそらくこのただならぬ空気に住民も察したのだろう。身を潜めているような気配を多く感じた。

最後にアルニスの前に残ったのは大量の燃えかすの山とその上に刺さった煌々と光る槍だけだった。

槍を調べようと焦げた石段を駆け上がり、上げたように空へと舞い上がり、

街のとある尖塔へ向かった。

月が綺麗なおかげで、尖塔までの距離はおよそ百メートルほどだろうと大体分かった。

そして尖塔の上に一つの人影が佇んでいる。槍はその人影に向かっていていることは明らかだった。

魔物を倒した正体。

興味をそそられたが、甲冑の擦れる音が耳に聞こえて、追うのは断念した。

路地の向こうから、集団が近づいてくるのが分かった。

おそらく騒ぎを聞きつけた騎士団だろう。

音のする路地を見つめながら嘆息すると、再び尖塔へ視線を追った。

その時には人影も、自分の薄皮一枚を焼いていった槍も一緒に忽然と消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1583z/>

ヒエルア大陸英傑録「アルニス編」

2011年12月5日18時57分発行